BOOK REVIEW 書評

風邪見鶏（かざみどり）

三宅善信著

伝染病との戦いと宗教

丹羽宣子著

聖書「出エジプト記」にある過ぎ越しの祭との酷似から、著者は宗教が伝染病の危険性の説明と回避の装置になったと指摘する。

源頼光が退治した大江山の鬼は、天然痘にかかって顔が崩れた人だという。始まりは大陸から船が入る難波津で、今でいうグローバリゼーションの副作用である。鬼退治の桃太郎のモデルになった吉備津彦が滅ぼした「温羅（うら）」も、新羅の圧迫から逃れてきた百済の王子だという。今では大陸・半島から渡り鳥が鳥インフルを運んでくる。（集広舎、1200円+税）

〈僧侶らしさ〉と〈女性らしさ〉の宗教社会学

僧侶として生きる女性の思い

丹羽宣子著

著者は子育て最中の30代で、仏教に親しみを感じているが仏教信徒とは言えない在家の社会科学者。現代の日本社会で女性が僧侶として生きることの実態を、アンケート調査と十数人からの聞き取りからまとめている。調査対象は女人成仏を唱える法華経に基づく日蓮宗だが、著者はその檀家ではない。女性僧侶に着目したのは、「女性僧侶に関わる諸問題は、現代日本仏教の状況を映し出す鏡」との考えから。

日蓮宗の僧侶は約8千人で女性は約90人、女性の住職率は5%で他宗よりやや高い。尼僧は出家本来の非婚、剃髪が条件だが、女性僧侶にそれはなく、日蓮宗女性教師の会には有髪者もいる。つまり、世俗化した日本仏教が、世俗に埋没することなく本来の役割を果たしていく上で、女性僧侶はその最前線にある。

階層的な仏教界は典型的な男社会で、女性は普通、住職の妻として補助的な役割が求められる。ところが女性僧侶にはそうした補助者がいないので、それに加えて家事・育児がのしかかる。「奥さんがほしい」というのが彼女らの本音だ。

僧侶らしさで課題になるのが剃髪。剃髪すれば身も心も引き締まるが、普通の人たちから距離が遠くなる、子供の心の負担になるなどの思いから、便宜的にウィッグや帽子を使ったりする。女性であることには、有言、無言の障害がある。宗派の会合などでは常に少数で、声明では声が高いことから葬儀で敬遠されたりする。

もちろん、子育てや介護などで女性たちに親身になれ、地域や檀家から喜ばれている女性僧侶や、これからは女性の時代だと、父親に背中を押されて寺を継いだ女性もいる。日本で最初に出家したのは3人の女性だし、観音信仰の広まりからも、日本仏教における女性の役割は大きい。

高齢化の今、女性目線での対応が家庭でも地域でも求められている。本書を読みながら男性として反省させられるところも多い。女性の問題は男性の問題でもあるのだろう。（晃洋書房、4200円+税）

都会のオアシス

天祖神社（東京都江東区）

天祖神社（田中寛之宮司）の御祭神は天照大御神。社伝によれば、創建は推古天皇の時代で、厩戸皇子（聖徳太子）作の神像が御神体として祀られる。永享年間に社殿が崩壊し、戦乱で修復が進まなかったが、下総の沙門良博が主人の新田義興に相談し、天文10年（1541）に再建される。その後も安政・大正の大震災で社殿が崩壊し、現社殿は昭和４年（1929）に日本初の鉄筋コンクリート社殿として造営された。

天正年間（1573―91）に疫病が蔓延した際には、当時の天下人・織田信長の使者が参向して流鏑馬を献じたところ、たちまち疫病が治まったという。

第二次世界大戦の東京大空襲で下町が大火事に見舞われ、10万人の犠牲が出た際は、天祖神社の社殿のみ消失を免れ、避難してきた700人余の命が救われた。そのことは今も「神様が守った」と語り継がれている。

東京メトロ、東武伊勢崎線、京成押上線、都営浅草線押上駅から徒歩12分。

神を統べる者　厩戸御子倭国追放篇

荒山徹著

神道と仏教の共存を実現

新聞記者として在日韓国・朝鮮人の指紋押捺拒否運動を取材したのがきっかけで韓国研究にはまり、退社後、韓国に留学してハングルを学び、日韓史を題材にした伝奇小説で1990年にデビューした著者が、「和国の教主」とされる聖徳太子の新解釈に挑んだ。中国や朝鮮のように大きな廃仏を起こさず、神道と仏教が共存するようコントロールした人物だと。全3部作で、本書は7歳の太子が中国・陳の揚州に渡るまで。

百済より仏教が伝来して約20年後、用明天皇の第二皇子厩戸は霊性が豊かで才能に恵まれ、百済語や漢語など外国語にも通じるようになる。当初、欽明天皇は外来の仏教を蘇我氏に与え、国としての受容には慎重だった。

母が蘇我稲目の娘だった厩戸は、叔父の馬子が所蔵する仏典を、7歳にして読破したが、仏教を信じるには戸惑いがあった。その深い意味が今ひとつわからず、日本古来の神々との関係も見えなかったから。

時の敏達天皇は欽明天皇と違って仏教を警戒し、有力豪族で軍事と神事を司ってきた物部氏が、反仏教の先鋒であった。物部守屋は神々と仏教との争いで鍵を握る人物が厩戸だと考え、皇子を密かに自邸の書庫に導く。驚くことに、そこには馬子の書庫にもない仏典がそろっていた。

厩戸を危険視した敏達天皇は、伊勢神宮に遣わしていた斎宮を呼び戻し、秘術を使って皇子を亡き者にしようとする。厩戸の護衛者とのアクロバティックな戦いはスリリングで、さながらアニメのよう。

危機一髪で厩戸を救ったのは、百済から渡来していたインド僧。その計らいで、厩戸は中国の南、陳の揚州に渡る。そこで目にしたのは、仏教と道教の激しい争い。そのいずれもが厩戸を自派に取り込み、教えの復興を図ろうと、熾烈な戦いを始める。果たして仏教は国を亡ぼす教えなのか、その逆なのか、厩戸はその答えを求め天竺を目指す。

いかにも伝奇小説だが、本書の底流にある宗教論はすぐれて今日的なテーマでもある。（中央公論新社、1800円+税）

くるま暮らし。

静慈彰著

シンプルを極めれば自由に

41歳の真言宗僧侶の著者は、2016年からワゴン車暮らし。住職をしている彦根市の寺に月1回帰るほかは、主に東京で派遣僧の仕事をしながら、ほぼ週休5日で、好きなサーフィンや温泉巡りで過ごす。

衣食住からノートパソコン、バッテリー、調理器などの生活用品は車に完備。IT環境の整ったコンビニを活用すれば、仕事は快適にこなせる。車内環境も2年間かけて改造して、いい居心地。平日の昼寝は気持ちよく、雨の日は雨音を聞きながら瞑想するという。

もっとも、そこに至るまでの人生は、社会不適合者を自称するように、並大抵ではなかった。父は大学教授で住職、母は医大卒という高学歴の親のもと、優秀な兄と気楽な弟の間で必死で勉強し、入った私立男子校でひどいいじめに遭う。教師や学友に失望した著者は、一切の勉強を放棄し、自宅浪人。父の希望と違う大学に入るが、3年生でひきこもる。宗教書など読み漁り、人生は苦であるという釈尊の教えに出会う。

何とか卒業し、父の縁で高野山大学で真言学を学び、僧侶になって、ロサンゼルスの寺の開教師に迎えられたが、愛欲の業の、悪戯好きの、滑稽な悪魔だった。

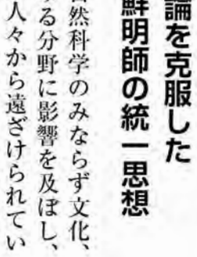
裁判では、事件の計画性が争点になる。彼が時限爆弾を網棚に置いたのは、できるだけ人的被害を避けるためで、無関係の人を殺そうとは思っていなかった。しかし、3回も実験していたのが決め手となり、悪質で社会的影響も大だとし、死刑判決が言い渡された。

当初、彼は理不尽な裁判に憤るが、差し入れられた聖書を読み、イエスも死刑を宣告され、十字架に掛けられたことを知り、親しみを覚える。そこから聖書の学びを始め、プロテスタントの教誨師の教誨を受け、次第にイエスが語りかけてくるのを感じるようになる。そんなに苦しまなくてもいい、神を信じることで死者にも救われる道がある、と。

短歌を作るようになったのは、雑誌「信徒の友」への投稿がきっかけ。やがて入門書を学び、短歌結社「潮音」に入り、一般紙の歌壇にも投稿するようになる。吃音もあり自分の思いをうまく表現できなかった彼が、獄中で出会ったのが短歌だった。（ちくまプリマー新書、840円+税）

ある若き死刑囚の生涯

加賀乙彦著



聖書と短歌に救われ

主人公は24歳の1968年、横須賀線の電車を時限爆弾で爆破し、1人を死亡、28人に重軽傷を負わせた。彼は同年逮捕され、27歳の71年に最高裁で死刑が確定、32歳の74年に刑が執行された。

受刑中、73年にプロテスタントの洗礼を受けている。

主人公の歌人としての活躍に驚いたのが著者との交流の始まりで、死刑執行前に託された歌集の発行を、著者は95年に実現した。精神科医で東京拘置所勤務の経験がある著者が、89歳にして彼の評伝を書いた。

1943年、山形の小さな農家に生まれた主人公は、父をレイテ戦で亡くし、中学卒業後、大工見習いになるが、職を転々とする。幼なじみの女性と再会し、同棲するようになるが、奔放な彼女に翻弄される。吃音で引っ込み思案だった彼は、彼女が仕事仲間と関係したのを恨み、彼女が利用する横須賀線を爆破しようと考える。それを促したのは悪魔だが、大物の悪魔ではなく、小者の、悪戯好きの、滑稽な悪魔だった。

裁判では、事件の計画性が争点になる。彼が時限爆弾を網棚に置いたのは、できるだけ人的被害を避けるためで、無関係の人を殺そうとは思っていなかった。しかし、3回も実験していたのが決め手となり、悪質で社会的影響も大だとし、死刑判決が言い渡された。

当初、彼は理不尽な裁判に憤るが、差し入れられた聖書を読み、イエスも死刑を宣告され、十字架に掛けられたことを知り、親しみを覚える。そこから聖書の学びを始め、プロテスタントの教誨師の教誨を受け、次第にイエスが語りかけてくるのを感じるようになる。そんなに苦しまなくてもいい、神を信じることで死者にも救われる道がある、と。

短歌を作るようになったのは、雑誌「信徒の友」への投稿がきっかけ。やがて入門書を学び、短歌結社「潮音」に入り、一般紙の歌壇にも投稿するようになる。吃音もあり自分の思いをうまく表現できなかった彼が、獄中で出会ったのが短歌だった。（ちくまプリマー新書、840円+税）

宗教新聞フォーラム

曼荼羅の宇宙に触れる

東京都練馬区にある真言宗智山派の観蔵院（小峰智行住職）には曼荼羅美術館が併設されていて、染川英輔画伯が18年かけて描いた両部曼荼羅を中心に、日本の仏画やネパールの仏画、古いインドの文字「悉曇文字（梵字）」の書、ミティラー民俗画、ミニアチュールなどが展示されています。

曼荼羅とは、2500年前にインドで起こった仏教が約1世紀を経た最終段階である密教の教えを絵画で表現したもので、日本には平安時代、唐に留学した空海により伝えられました。長安・青龍寺の恵果和尚から灌頂を受けた空海は、曼荼羅をはじめ仏典、仏具をそろえて帰国し、日本で密教教学を完成させます。以来、世界的に密教文化が根付いたのは日本とチベットで、日本では独特な自然風土を背景に日本曼荼羅が発展します。

そこで、現代に描かれた曼荼羅を見ながら、小峰彌彦長老と共に日本人の生き方や世界観を学びたいと思います。また、アジアをはじめ各国で美術活動をしている小峰和子館長からも興味深いお話を伺います。

［講　師］小峰彌彦（みちひこ）観蔵院長老・大正大学元学長
小峰和子 曼荼羅美術館館長

主 催：宗教新聞社
後 援：NPO法人にっぽん文明研究所
日 時：4月25日（木）午後1:30開場　午後2:00～午後3:30
会 場：観蔵院　曼荼羅美術館（東京都練馬区）
交 通：西武池袋線・練馬高野台下車徒歩10分（ホームページをご参照ください）
会 費：1000円（本紙購読者無料、拝観料含む）
申 込：氏名、住所、電話番号を記入の上、4月19日（金）までFAXかEメールで。
●宗教新聞社　〒160-0022　東京都新宿区新宿5-13-2　4F
電話03（3353）2940　FAX03（5363）5182
Eメールreligion@sage.ocn.ne.jp
●にっぽん文明研究所　電話045（481）9361　FAX045（491）7461

「性解放理論」を超えて

―統一思想vs神の言（ことば）を否定する思想―

性解放理論の思潮、フェミニズムなどを概観し解説。それらに対する統一思想による批判と克服を行うとともに、天来の愛と性のあり方を提示し、神の創造理想と真の家庭理想の実現のための思想的啓蒙を図る。

人権思想に従う人生か、神が人間に与えられたみ言に従う人生か、文鮮明・韓鶴子ご夫妻によって打ち立てられた「統一思想」に、今その解決の道を求める。

一 性解放理論の台頭
二 フロイトを超えて
三 フロイト左派を超えて
四 フランクフルト学派を超えて
五 ポスト構造主義を超えて
六 フェミニズムを超えて
七 日本の性解放理論への批判

●大谷明史 著　●四六判/208頁
●定価1,728（本体 1,600円+税）

蘇る愛と生命

―進化論を克服した文鮮明師の統一思想

進化論は今、自然科学のみならず文化、芸術などあらゆる分野に影響を及ぼし、その結果、神が人々から遠ざけられている。本書は、進化論を批判・克服する文鮮明師の思想を、師の言葉を通して紹介するとともに、「統一思想」に基づいた新創造論を提示する。進化論の間違いに気づかせ、神の創造理想という真の人生の指針が与えられる一冊。

I 進化論から新創造論へ
II 神の実在と創造の原理
III 創造神話と新創造論
IV 霊界からのメッセージ

●日本統一思想研究所 編著　●四六判/320頁
●定価2,160（本体 2,000円+税）

（株）光言社 〒150-0042 東京都渋谷区宇田川町 37-18 トツネビル3F お問い合わせ TEL03-3460-0429
ご注文「光言社オンラインショップ」https://www.kogensha.jp/shop/